日本キリスト教団　久宝教会

2022年12月18日 待降節（アドベント） 第4主日礼拝

メッセージ「インマヌエル 今、現れる」　　岡嶋千宙伝道師

聖書 イザヤ書 7章10-16節

本日の御言葉は、「イザヤ書」からです。旧約に納められた39冊の中で、「詩編」に続いて（新約引用68ヶ所）、最も多く新約において引用されている「イザヤ書」（新約引用55ヶ所）。今日は7章の言葉です。「マタイによる福音書」の著者は、イエスの誕生が、かつて神様によって人々に与えられた救いの預言が成就したものだ、と語ります。その証拠として引用されるのが、「イザヤ書」7章14節。キリスト教会ではよく知られている一節です。「マタイ福音書」でイエスの誕生と結びつけられ、そしてキリスト教では、馴染みのある箇所ですが、もとの文脈は、イエスの誕生とは全く関係がありませんでした。この言葉が記されたのは、将来に現れる救い主のことを預言するためではなく、その当時、現実に起こっていた状況の中で、神による解放が与えられることを知らせるためでした。時代は紀元前8世紀。周囲を敵国に囲まれ、各国からの圧力に疲弊し四面楚歌の状態にあった国ユダ王国。その国の王アハズに対して、今後その状況は改善され、国は再び平安を取り戻す、との神の約束を預言者イザヤが伝えたものでした。ですから、あくまで、当時の現実が背景にあって、それから何年、何十年、何百年後かの将来のことは、全く想定されてはいないのです。ですが、神の生きる言葉とされる聖書は、記された当時の状況を越えて、時代と場所を変えて、異なる時と異なる場で、そこに生きる人々にとっての現実に則した言葉となります。「マタイ福音書」の著者が、自分の生きる状況で、イザヤの言葉を受け止め直し、そして、イエスの誕生を預言する言葉として記したのも、その一例と考えられるでしょう。聖書の言葉は、一つの見方、一つの捉え方、一つの解釈に固定されません。新しさに開かれています。もちろん、これまでの捉え方を無視するのではなくて、それらを踏まえながら、同時に、新しさを吹き込んでいくのです。それが許され、あるいはそれが求められているもの。聖書。本日の箇所。聞きなれ、慣れ親しんだ御言葉かもしれません。ですが、これまでの受け止め方を横に置いて、今、わたしたちの生きる状況で、向き合ってみましょう。自分たちの今を通して抱く思いを素直にぶつけ、そこから、わたしたちの歩む道の先を示す神の導きをとらえ直してみたいと思うのです。

日本でも、他の国々でも、この世界が今、閉塞感に満ちていると感じるのはわたしだけではないと思います。3年前から、世界中で新型コロナウィルスによる感染が拡大しました。今年の半ばには、感染拡大が下火になりつつありましたが、冬を迎え、日本だけではなく各国で再び感染の拡大傾向がみられます。完全な終息にいたる道はまだまだみえない状態です。ウクライナを始め、聖書の舞台となったパレスチナでも、シリアでも、あるいはイランやソマリアでも、各地で、国家間、民族

間、または、異なる政治・宗教思想を持つ者たちの間での争いが耐えません。二酸化炭素など、温暖化物質の排出削減が進まない中で、気候変動による自然災害が相次ぎ、多くの人たちが住む場所を失い、そして命を落としていっています。紛争や環境破壊の余波を受けて、自国から逃れる人たちが多くなり、その人たちを受け入れる国との間で衝突が広がっています。さらに、これらの情勢の影響で、世界規模で経済が不安定になり、物流の停滞が進み、日本では様々な物の価格が上昇しています。その割には収入がいっこうに増えず、むしろ減額されていく中で、日々の生活すらままならない人たちが増えていっています。様々な場面と分野で分断が生まれ、格差ができ、あちら側とこちら側との間に広がる埋められない溝を挟んで、解決の糸口さえ見いだし得ないいがみあいが続いています。個人の生き方について言えば、一方で、インターネットなどの通信技術の飛躍的な拡大により、誰もが容易に自分の声を世界中に届けやすくなっています。本日の礼拝が、オンラインでライブ配信されているのもその一つの成果と言えるでしょう。ですが、他方で、誰もが簡単に声を発せられるがゆえに、多くの声が氾濫して飽和状態となり、特定少数の影響力のある人たちのものを除いて、一人一人の一つ一つの声が「その他大勢」でくくられ、省みられることなく、なきものにされていっています。閉塞感。分断。格差。そして、個人の存在の希薄化。

「イザヤ書」に戻りましょう。先程見た通り、この箇所は、当時のパレスチナ地方にあったユダ王国の王に対して向けられた言葉です。周囲を敵対する国々によって固められ、国家滅亡が目の前という万事休すの状況におかれていた王に向かって、預言者イザヤが、その状況は改善されるのだ、という神の救いの約束を語ったものでした。この箇所、特に14節は、これまで、様々な角度から、様々なテーマで、様々な人たちを巻き込んで、議論されてきました。この節では「おとめ」と訳されているけれど、それを引用する「マタイ福音書」では「処女」と訳されることもあるのはなぜか？ そもそも、この「おとめ」とは誰なのか？ そして、そのおとめが産むとされる「男の子」とはいったい誰なのか？ 「マタイ福音書」の著者は、「おとめ」を当時は処女であったマリア、そして「男の子」をイエスであると理解しました。キリスト教会では「正解」とされるマタイの理解を含め、これまでになされたそれらの議論の場から一歩身を引き、こう考えてみてはいかがでしょう。「おとめ」と訳された言葉。それは、一人一人の「わたし」であり、「あなた」である。そして、そのおとめが身ごもり産む「男の子」とは、閉塞感に満ち、個がないがしろにされる現代の世界で、必死に生きるわたしたち一人一人が、神によって約束された新しい世界をもたらすために紡ぎだす一つの果実である、と。出生時に「男」と判断され、社会上も「男」として生きている人たちは、「おとめが自分だ」と言われても当惑するかもしれません。しかも、次の言葉は「身ごもって男の子を産む」です。身ごもるのは、今の生殖技術のもとでは、当然に女性だけができることですし、「産む」のも女性です。ですが、ヘブライ語をたどると、「産む」と訳されている言葉は、男性を主語

に使われることもあり、「（誰々の）父となる」という表現で訳されたりします（例創世記 4:18）。ついこの前まで、あるいは場所によっては今でも、「男」と「女」のラインは越えられないものとされています。「男」であるならば「女」ではなく、「女」であれば「男」ではありません。そして「男」と「女」以外の選択肢はあり得ません。ですが、本日の御言葉にある「産む」という言葉は、その境界線を越えるのです。産むという表現が当てはまるのは女性だけではありません。男性も「産む」のです。男か女か、あるいはそもそも、性別に関係なく、一人の人間が、ある一つの果実を産み出していく。その人が今ある状況から、別の状態へと動きだし、これまでとは異なる世界を描き作り出していく。その一人の人間とは、今、この言葉を受けとる「わたし」。閉塞した世界に流れをもたらし、再び動きを与えていくのは。声が消されず、命が削られず、誰もが自分らしく、自分の望むあり方で生きることのできる世界を作り出すのは。他の誰でもない一人一人の「わたし」。そして、生まれてくる「男の子」が成長する過程で食べるとされる「凝乳」と「蜜」。蜜はわかるけど、「凝乳って？」と思った方もいらっしゃるかもしれません。わたしも知りませんでした。牛乳や山羊の乳に、酸などの酵素を作用させてできる凝個物で、チーズの原料となるものだそうです。旧約の中でもあまり用いられない言葉で、当時としては珍しい食べ物だったのかもしれません。問題は「凝乳が何か」ではなくて、その性別です。ヘブライ語には性別があるのですが、この「凝乳」と訳されている言葉は女性名詞。ちなみに、もう一つの食べ物「蜜」は男性名詞です。男性である「男の子」が、女性である「凝乳」を食べる。話しようによってはグロテスクに聞こえなくもないですが、大切なのは、ここで「男」と「女」の境界線が交差されていることです。「男の子」が食べるのは、男性の食べ物である「蜜」だけではなく、女性の食べ物である「凝乳」でもある。「男」か「女」によって分別されるのではなく、どちらかに固定されることなく、どちらも記されていること。そして、その男女という境界線が交差された食べ物を、おとめから産まれた男の子が食べる。もう一つ、別の交差が起きています。「イザヤ書」には、イエスの誕生と結びつけられる神の救いの言葉が、他の箇所にも記されていて、この男女の交差を含めた記述が、11 章 1-10 節にもあります。ここでは、「エッサイの株から」出る一つの「若枝」が、イスラエルの人々に救いをもたらす存在として語られています（11:1）。これが、のちのイエスとして考えられるようになるのですが、その若枝がまとう神の霊が「知恵と分別」「思慮と勇気」「主を知ること」「主を畏れること」という言葉で特徴づけられています（11:2-3）。注目すべきは、これらの性質を表す言葉すべてが、「凝乳」と同じく女性だということです。神の霊をまとう「若枝」は男性であり、この 11 章でも、男女という境界線が乗り越えられているのです。この世に光を、希望を、平安と平和をもたらす存在としての一人一人。神から救いを約束され、その約束のために、一歩を踏み出すことを促されているわたしたち一人一人。この世界を変えていくために。神によって示された世界を築いていくために。境界線を、人々を分断する

線を、溝を、越えていく、消していく。男か女か、ということだけではありません。「あれかこれか」という思考パターンを変えていく。これまでの常識に拘るのではなく、見つめ直してみる。社会の当然、世の中の当たり前が作り出す線を引き直してみる。必要に応じて、その線を越えて消していく。そして、新しい世界へと通じる道を描き、その道を歩いていく。

そんなことは言っても、一人一人というなら、イエスはいらないのでは？ キリスト教会で信じられているイエスはどこにいったの？ 一人一人で変えられるのなら、イエスは用済みってこと？ もしそうなら、キリスト教ではなくなるんじゃない？ そう思う方もいるかもしれません。そんなことはありません。なぜなら、イエス自身の生きざま、死にざま、そして復活の姿が、まさしく、先程見た、境界線を越え、交差させ、そして消していくことを体現しているからです。当時の社会の当然を疑い、当たり前を変え、常識から外れた存在として苦しみの中に生きる人々と共に生き、新しい世界の到来へと繋がる歩みをなした人イエス。そのイエスは、わたしたちにとっての唯一のモデルであり、慰めであり、導き手であり、次の一歩を踏み出すための、次の瞬間を生き続けていくための、命の水の源であり、だからこその、救い主です。

この世を生きるとき、周りから、あるいは自分の中で、様々な反発と圧力があり、思うように歩むことがなかなかにできません。問い直す。立ち止まる。変えていく。変わっていく。言うのは簡単だけれど、実際に、日々の一コマ一コマで、それを実現していくのはとても困難で、痛みを伴うものです。一人一人が求められているけれど、一人では決してできません。わたしも絶対に無理だし、実際に、もうダメだ！と諦めたことも何度もあります。でも、一人ではできないからこそ、仲間が、そして、導き手がいるのです。イエスは、この歩みが困難であることを自分の身を通して経験されました。当時の社会の常識を打ち破った彼の道は、困難に満ちた、十字架へと至る荊の道でした。自分自身で知っていたからこそ、イエスはわたしたちに、「重荷を追うものはわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」（マタイ 11:28-30）という言葉をくれたのです。「重荷を負わなくてよい」のではありません。重荷は負うのです。痛みを引き受けるのです。それが前提で、疲れたときには、しんどいときには、いったん歩みを止めて、イエスのもとで、休めばよいのです。一人一人が歩む。神によって、イエスによって求められ、促されています。難しいけれど、苦しいけれど、つらいけれど。それでも、一歩を踏み出す。歩み続ける。問い続ける。これでいいのか。これまで、でいいのか。この境界線が当たり前なのか。当然や常識の背後で、消されている声や命があることを忘れず、その囁きと灯火を聴いて、見つめ続けていく。一人ではなくて、隣にいるあなたと。そして、あなたとわたしの間にいる、イエスと共に。そのイエスによって建てられた教会で、みなさまと共に、礼拝を守れること感謝です。これから与えられる一週間の日々、イエスによって示された道を歩みながら、いよいよ誕生の瞬間である、次の日曜日、主の日を待ち望みたいと思います。